

月の法善寺横丁

1

包丁一本

さらしに巻いて

旅へ出るのも

板場の修業

待っててこいさん

哀しいだろが

あゝ若い二人の

想い出にじむ 法善寺

月も未練な 十三夜

月の法善寺横丁

「こいさんが、わてを
はじめて法善寺へつれて
来てくれまっただのは

『藤よ志』に奉公に
上がった晩やっただ。

はよう立派な板場はんに
なりいや云うて、

長いこと水掛不動さんに
お願いして

くれはりましたなあ。

あの晩から、わては、
わては、こいさんが
好きになりました」

2

腕をみがいて

浪花に戻りゃ

晴れて添われる

仲ではないか

お願い　こいさん

泣かずにおくれ

あゝ　いまのわてには

親方はんには

すまないが

味の暖簾にゃ刃が立たぬ

月の法善寺横丁

「死ぬ程苦しかった
わてらの恋も、
親方はんは
許してくれはった。

あとはみっちり
包丁の修業をつんで
一人前の料理人にな
ることや。
な、こいさん。待ってて
や。ええな、こいさん」

月の法善寺横丁

3

意地と恋とを

包丁にかけて

両手あわせる

水掛不動

さいなら さいさん

しばしの別れ

あゝ 夫婦善哉

想い出横丁 法善寺

名残りつきない

灯がうるむ

